読解『失楽園』（五）

道家弘一郎

A Reading of *Paradise Lost* (V)

The aim of this paper is to describe Adam as he is perceived in everyday life. Adam is a proper noun and, at the same time, a common noun referring to man in general. Therefore, we identify him as our own *self*. The same is true with regard to the relationship between Adam and Eve. We cannot but surmise what they were before the Fall, from what we are now. Therefore, Adam and Eve closely resemble us. We can imagine whatever they had experienced as if it happened to us.

On "the scale of nature" (V. 509), man's position is below that of angels and above that of animals. In Heaven, man's body could be elevated to that of an angel, that is, his spiritual body. The ultimate form of love between Adam and Eve is to become "one flesh, one heart, one soul" (Ⅷ. 499), neither influenced nor disturbed by mortal organs. However, we are far from this ideal condition, because we are bound and destined to die.

In the last two books, Michael reveals what would happen to Adam and Eve after the banishment from the Garden. Adam is shocked at and laments the miserable death of people who have fallen prey to many types of diseases. Michael advises Adam to maintain temperance for a long life, and says, "Nor love thy life, nor hate; but what thou liv'st / Live well; how long or short permit to Heaven" (Ⅺ. 553-554). Here we feel the poet's own tenderness toward the reader. At the end of the epic, we are filled with joy at the vision of "New Heavens, new Earth, Ages of endless date / Founded in righteousness and peace and love, / To bring forth fruits, joy and eternal bliss" (Ⅻ. 549-551).

三　孤独と愛と社会（承前）

エデンの園におけるアダムとイーヴの日常生活はどういうものであったか。天使ラファエルが、夫妻の愛を階梯（きざはし）として神の愛をめざし高く昇れと諭すのに対して、アダムはこう答える、「イーヴの美貌や性の歓びよりも、はるかに優って私を喜ばせるものは、彼女のあの優美な振舞い――常日頃、愛情と甘い素直さのにじむ、あらゆる言葉や動作から流れ出てくる彼女の上品な仕草です。これこそ心の一致、わたしたち二人が一つの魂であることの偽りなき証しです。結婚した二人の間に見られる穏やかな一致は、耳に聞こえるどんなに調和ある音声よりも快いものです」（八600―606）と。

しかしこう語りながらも、われながら「女房溺愛（uxoriousness）」の譏りを懸念するのか、けっしてこういう愛情に敗けているのではなく、最善のものをよしと見、よしと見たものを追い求めている、と弁明する。そして更にここで、愛が天に通じる道であり導きである、というのなら、天使たちの愛し方は、眼差しだけでか、それとも光を交じり合わせてか、つまり間接的な接触か、それとも「直接的な接触（immediate touch. VIII. 617）」によるのか、と問う。

天使の性生活

天使ラファエルは頬をバラ色に染めて、愛がなければ幸福はない、お前が肉体で楽しんでいるものは、清らかなものであれば何であれ、われわれ天使も豊かに楽しんでいる、しかも、粘膜とか、関節、手足といった邪魔な障害物は何一つない、もし天使たちが抱擁しようとするならば、純粋と純愛との合一をめざして

空気と空気が交わるよりも易く、全面的に交わり、人間のように肉体は肉体と、魂は魂と交わるというふうに交流手段を制限する必要は全くないのだ(八620―629)、と語る。

「空気と天使」といえば、ジョン・ダンの'Air and Angels'を連想させる。このダンの詩では、天使は空気の肉体をもっている。

このような天使の特性はすでに第一巻において、「天使たちは好むがままに、男女いずれの性をも、あるいは同時に男女両性をも、自分の性とすることができる。その純粋な霊質は柔かく純一で、関節や肢体に結びつけられたり縛られたりすることなく、厄介な肉のように、堅たそうで脆い骨の上に造られているのでもない。天使たちは好むがままに、膨張したり凝縮したり、輝いたり暗くなったり、どんな姿にもなって空気のようにその目的を果たし、そうして愛の業も憎しみの業も成しとげることができる」(一423―431)と記されている。

天使の肉体

さればこそ、戦場で天使マイケルの鋭い剣の切っ先が、セイタンの右腹を深く抉ったとき、セイタンは痛さのあまり身をよじって転げまわったけれど、その肉体はまだ天使としての霊質を失っていなかったから、傷口はすぐに塞がった。そして傷口から噴き出した血も天国の天使たちが流すような神酒(ネクター)に似た体液であった(六320―333)。

そもそも天使というものは、「脆い人間のように、心臓や頭脳や肝臓や腎臓という体の内部のいろいろな器官においてではなく、体のあらゆる部分において生き生きと生きているから、全面的な滅亡によるのでなければ死ぬということはありえない。その流動的な組織では、流れ漂う空気と同じように、致命的な傷をうけるはずもない。天使は全身これ心臓となり、頭脳となり、眼となり、耳となり、知性となり、感覚となって生き、自由自在にみずか

ら肢体を具え、密にもあれ疎にもあれ、いちばんふさわしい色、形、大きさをとるのである」（六344―353）。

このような天使の形状のほかに、『失楽園』における天使のもう一つの特徴は、アダムの食卓に招かれて人間と同じ食べ物を食べることである。天使ラファエルはアダムに語る、「おおよそ被造物はすべて食べ物によって養われ維持されなければならない」（五414―415）、「人間も天使もその体内にすべての下級な感覚機能をもっており、それによって聞き、見、嗅ぎ、触れ、味わっている、そして味わうことによって混ぜ合わせ、消化し、吸収し、やがて肉体的なものを霊的なものに変えてゆく」（五409―413）と。

自然の階梯

天使は「自然の階梯（the scale of nature, V. 509）」、換言すれば「被造物の階梯」の最高位を占める存在である。人間は、その直ぐ下に位置する。天使ラファエルは人間アダムに対し、「人間は半ば霊的で理性的（rational, V. 409）存在であるが、天使は純粋に霊的で英知的（Intelligential, V. 408）存在である」と語る。森羅万象をめぐって両者の対話は次第に深まり、霊魂の本質である理性には、推論的（Discursive, V. 488）と直観的（intuitive, V. 488）の区別があり、推論的理性は人間のものだが、直観的理性は天使のものだ、ただし程度の差であり、本質は同じだ、と天使ラファエルはいう。この前後二箇所の言及から discursive reason は rational、intuitive reason は intelligential ということになる。

ところで「自然の階梯」はあたかもピラミッドのように、上位の存在は下位の存在をどっかと踏まえ、しかも切れ目なく連続している。このように上位は下位に支えられながら、それが到達できない高みに聳えている。天使の優れた資質、輝ける姿、神々しい光輝、高尚な力は、とうてい人間の及びもつかぬものである（五456―459）。天使

は人間と同じ食べ物を食べながら、肉体的なものを霊的なものに変え、おおよそ人間には想像もつかない空気の体をもち、変幻自在に変化することができる。

それにもかかわらず、天使が人間と同じ感情をもっているのは微笑ましい。天使間の愛の交わりは「直接的な接触」によるのかと尋ねられると、天使ラファエルは頬をバラ色に赤らめた（八617―619）。またアダム家の食卓に招かれたとき、イーヴは裸身のまま食卓につき添い、風味豊かな飲物を二人の杯に溢れるばかりなみなみと注いでくれた。天使ラファエルがイーヴの裸身にうっとりと見惚れたとしても、このときばかりは、咎められることはなかったであろう、という。

Meanwhile, at table, Eve
Minister'd naked, and their flowing cups
With pleasant liquors crown'd: O innocence,
Deserving Paradise! if ever, then,
Then had the sons of God excuse to have been
Enamour'd at that sight.
V. 443-448.

'then, Then' の繰返しが利いているし、ミルトンが早速それに続けて、「しかし決して天使の心を、邪悪な愛が支配していたわけではないし、傷ついた恋人の地獄ともいうべき嫉妬心が認められるわけでもなかった」と弁解する。

But in those hearts
Love unlibidinous reign'd, nor jealousy
Was understood, the injur'd lover's hell.
V. 448-450.

だが、こんな弁解をしなければならないこと自体が怪しい。libido の登場はびっくりで、現在はもっぱら精神分析の専門用語として用いられている。OED にもフロイトに関する文章が初出である。しかし libidinous は意外に古く、十五世紀半ばから用いられているが、unlibidinous は『失楽園』のこの箇所のみが引用されている。

また、天使ラファエルは、「自然の階梯」は昇ることができる、とアダムに教える。すべての被造物は「一つの原質料（one first matter, V. 472）」から生成発展、進化してきたものであるから、最後には人間も天使となることができる、というのである。そのときには、「天使と同じ食事をしても、天使の食事が口に合わないとか、あまりに軽すぎると思うことはなくなるだろう。そのときお前の体は、このような肉体の糧から離れて、時が経つとともに浄化され、遂には尽く霊となり、翼が生えて天使のように空中高く飛翔したり、あるいは地上なり、天上の楽園なり、好むがままに住むことができるようになる」、ただしそれには条件がある、「常に従順であり、子として父からの愛を常に堅く完璧に保っていなければならない」（五493―503）。楽園での生活はいわば条件つきの試用期間である。

人間の進化

かくして、人間の目標は天使である。人間の理想の体は天使のごとき空気の体になることである。アダムとイーヴの愛の理想は、天使と同じように、空気と空気が混じり合うよりも易き全面的な合一、純粋と純粋との結合である。これこそ「一つの体、一つの心、一つの魂」（八499）になることである。

藤井武は、天使ラファエルが天使の愛について語ったこの一節（八620―629）に注を付して、「人がその肉体に於て享受する純なる愛の悦楽は、更に優れた程度に於て、何らかの方法により、天使も享受する。同じ事が復活後の生活についても言い得るであろう」という。

復活後の生活

藤井が復活後の生活について、このような推測をする根拠は、パウロのコリント前書十五章44節「肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである」というに基づくと思われる。「肉のからだ」は「プッシュケーのソーマ（σῶμα ψυχικόν）」であり、「霊のからだ」は「プネウマのソーマ（σῶμα πνευματικόν）」である。プネウマは息をも風をも意味するが、詰りは空気にほかならない。

だが、復活体が単に空気の体であることに、人は満足するであろうか。グレアム・グリーンの *The End of the Affair* に、主人公セアラが、パーク・ロードのカトリック教会のなかで、石膏像や写実的な絵画に囲まれながら、「肉体の復活」に思いをめぐらす場面がある。彼女は、多くの人を傷つけてきた自分の肉体に嫌悪感をもつ。人間とは何の類似もない、無定形な、宇宙的な神、霧のように椅子や壁の間で動いているものなら、信じられそうな気がする。いつかは自分もその霧の一部になるだろう。そうすれば永久に自分から逃げられる気がする。しかし彼女は自

分の肉体ではなく、恋人モリスの肉体のことを思った。あの肉体が霧になることを願うだろうか。人生が彼の顔に刻みつけた皺、空襲で崩れる壁からセアラを守ろうとして彼の肩口にできた新しい痣。セアラはその痣が未来永劫に存在しつづけることを願う。でも、霧の私にあの痣を愛することができるだろうか。それなら私は厭わしい私の肉体を持ちたい、あの痣を愛するという、ただそれだけのために。私たちは自分の肉体が必要だから、肉体の復活を発明したのだ、と思い始めたとたん、石膏像に対する違和感は消えていった、というのである。

復活後の霊の体がどんなものか、肉の体のように明確に捉えることはできない。しかし、曖昧な、無定形な、個性のない霧（空気）の体ではあるまい。その点では三谷隆正の次の一節が最も正鵠を得ている。

基督教の復活論は個人がその諸々の個性的特殊相を具へたまゝに復活する、個性的な体を具有して有形的個別的に復活するといふのである。……個性のない捉へどころのない無形の霊が模糊として融け合った世界ではなくて、ひとり〳〵固有の復活体を有し又個性的意志主体たる人格が、その活潑々地たる個性のまゝに生き又相生きて神を讃むる生活が神の国の生活である。神の国は死せる者の国でなくて活ける者の国であるとイエスは教へたが、活ける者とは活ける個性者の謂である。神の国は潑剌として活ける人格的個性者の国である。

三谷隆正『アウグスチヌス』、『全集第一巻』326―327頁

神の国実現のとき、パウロは、「神がすべてにおいてすべてとなられる」（1コリント一五28）といった。内村鑑三は、この箇所の英訳'God may be all in all'を敷衍して'God may be all in each'「神各自に在て凡てとならん為なり」と解釈した、「我は永久に我である、個人は何時迄も個人性を失はない、然れども神は我等各自に在て一切となり

各自を通して働き給ふのである」（全集二四570―571）と。

ところで、復活体において生前における身体の障害はどうなるかという問題に対し、アウグスチヌスは、復活体はその人の最も完全なる身体の状態をもって顕れると考えられるが、ただその不完全が神のために負うた名誉の記号である場合には、その傷痕は復活体にも残るであろう、「何となればこれは名誉の記号であって不具ではなく、彼らの容貌に輝きを添えるものであるから」（『神の国』廿二19）と答えている（矢内原全集九439、『ヨハネ黙示録講義』）。

地上ではどんなに不完全なものも、復活のあしたには、その一つ一つが、その個性を生かされて完成し、そこに神が充ち溢れるのである。

アダムとは？

『失楽園』のアダムは個性者であると同時に一般者・普遍者である。アダムの名称が単数・複数両方で用いられたことは、創世記第五章一―二節に見られるとおりである。単数が一般者・普遍者を表わし、複数が個性者を指すと考えられるが、また、その逆に、個性者が単数で、一般者・普遍者が複数で表される場合もある。『失楽園』という作品のなかのアダムは、ひとりの登場人物である。主人公と呼ぶことにさえ反対する強力な文学者もいる（ジョンソン、ブレイク等）。その意味では個性者である。だが、同時に読者はすべてアダムに自分を重ね、アダムのなかに自分を読む。いわば人間のイデアのごとく一般者・普遍者である。ミルトンは「僅か二人の人間、しかし彼らのうちに全人類が含まれている（The only two of mankind, but in them／The whole included race, IX. 415-416）」といっている。

アダムとイーヴの誕生、出会い、新婚生活、来客ラファエルへの歓待ぶりなどについては、すでにいろいろな角度から触れてきた。したがってここではアダムとイーヴの日常生活を眺めることにしたい。いわば「或る日の、ありのままなる、アダムとイーヴ」である。

アダムとイーヴの日常

二人はまだ罪を知らぬ。子どももまだ生まれていない。初々しい新婚のカップルである。一日は夜から始まる。「大昔の人々は、太陽が西に没してから再び西に没するまでのあいだを一日とした」（岩波『科学の事典』944頁）。ユダヤ人もまた同じであった。したがって創世記第一章においても第一の日から第六の日まで「夕べがあり、朝があった」と、夕べを先に、朝を後にしている。この順序は暗闇の深淵から天地創造の大事業を成し遂げたもうた神の大能への賛美をあらわしている。

光は、創造の第一日、神が最初に造ったものであった。だが、太陽と月と星が造られたのは第四日目である。としたら、神が最初に造った「光」とはどういうものであるか。月本昭男氏の注には「光は生命と秩序と救いの根源の象徴」（岩波旧約聖書『創世記』3頁）とある。『失楽園』では、「天来の光、万物の原初（はじめ）にして、純乎たる第五元素（Light／Ethereal, first of things, quintessence pure, VII. 243–244）」であるという。

われわれが今に見る天地万物は順序を踏んで六日間で創造された。そして「夕となり、朝となった」という同じ言葉を繰返して、六日間の区切りとした。『失楽園』では同じ事柄ながら六回とも異なる言葉を用いて、その多様性を強調している。

(1) Thus was the first day even and morn; VII. 252.

(2) So even ／ And morning chorus sung the second day. VII. 274－275.
(3) So even and morn recorded the third day. VII. 338.
(4) Glad evening and glad morn crowned the fourth day. VII. 386.
(5) Evening and morn solemnized the fifth day. VII. 448.
(6) So even and morn accomplished the sixth day; VII. 550.

単純な反復と多彩な変化。

創造の業自体は六日間で終了し、創世記第一章はここで終る。第七日は第二章一―四節に見られる。

天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

これが天地創造の由来である。

第七日　第七日には「夕べがあり、朝があった」という記述がない。だが、「あった」ことは事実である。無ければ、第七の日は来なかったことになるからである。この点で最も示唆に富むのは、黒崎幸吉『旧約聖書略註』であった。「この神の安息は創造の工（わざ）よりの安息であって、被造物の保持、育成その他の仕事を休み給へる意味で

はない。「父は今に至るまで働き給ふ」（ヨハネ五・一七）神は今も尚ほその愛の働きの御手を休め給はない。唯その創造の御業を休止し給うたに過ぎない。夫故に神の経綸の全体より観察するならば、第七日はキリスト来り給ふまでの一時代を指すとも見る事を得。即ちキリストによりて神の新なる創造が始められ、キリストにありて人は新に造られ（コリント後五・一七）、世の終りにキリストによりて新天新地が創造せらるる迄が第七日である。この罪の下にある暗黒の世は一・二の定形なく曠空（むな）しくして混沌たる状態に匹敵し、キリスト光として来り給ひ、かくして我らキリストを信ずるもの、上に神の新たなる創造の御業が始められつゝあるものと見る事を得。夫故に第七日安息の意味がキリストによりて成就せられし以上は旧約的意味の安息日は最早やその必要無きに至れるは当然である（ヘブル九・一〇）」。

つまり、今も第七日にして、しかもこの第七日のうちに新天新地は創造され、「それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。人々は諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る」（ヨハネ黙示録二一23―26）ことになる。そこには、もはや夜が来ない。第八日という日は存在しない。

六面繰返された「夕べがあり、朝があった。第何日である」という表現は、すべて、その日を締めくくり、翌日があることの予告であった。第七日にその必要はない。この日、時間は止まって、永遠となる。

アウグスティヌス

黒崎には偉大な先蹤があった。第七日について逸早く言及したのはアウグスティヌスであった。『告白』の最後は、第七日をめぐる思索で結ばれている。六日間に造られたすべてのものは「はなはだ善く」、いとも美しい秩序をなしているが、しかし、それぞれその定められた限界に到達すると、過ぎ去っていかなければならない。じっさい、それらのものは時間の経過のうちに消え去るものであり、そのことを朝があり、また夕があると表現する。「しかし第七日には夕もなく、また日没もない。それは、主よ、あなたがこの日を聖とし、永遠に続くものとなし給うたからである。……それは、われわれ人間も、善い仕事をなし終えたのち、あなたのうちに、永遠の生の安息日に憩うようになるであろう、ということを予告するためである」（第三十六章五一）。

第七日が終りのない永遠の生活を示すという点で、黒崎幸吉とアウグスティヌスの解釈は一致する。ただアウグスティヌスの中世的な「静寂主義」と、黒崎幸吉の近代的な「活動主義」とは顕著な対照をなす。

ところで、第七日が、このように歴史の終焉、宇宙の完成の日というのであれば、第一日はどういう日であった、とアウグスティヌスは解するのであろうか。アウグスティヌス『告白』の末尾の三巻（第十一―十三巻）は創世記第一章の注釈である。しかし単なる聖書の注解ではなく、神のことばについて、どれだけのことを理解しているかの告白であり、かかる理解を賜った神への賛美と感謝の表白として、この三巻は『告白』の掉尾を飾るにふさわしいのである。

「初めに、神は天地を創造された」

天とは？

「ここで「天」とはheaven of heavens「諸天の天」ともいうべきもので、われわれが見上げている空とは違う。これは天の使の住家――天の使がいるところであって、その性質は、天の使と同じ性質、同じspiritual　霊的な存在である。それを天と言っている。「地」というのは、地球とわれわれが空に見上げている太陽とか月とかその他の星とかの天体を含めて言うという考えなのです。」したがって「天なるものは天の使のごとく霊的存在であるから、これは変化がない。」

一方、「「地は定形なく…」というのは、まだこのわれわれに見られるように、天地がコンクリートに造られない前ですから、そこに物質はあるが形のない状態である。…この万物が作られる素材となった物質、形なく見ることのできなかった物質というものは、どうしてできたか。それは神が造ったにはちがいないが、神の実体のemanation　派出としてできたものではないかという考えに対しては、アウグスチヌスは決してそうではない。神は無から物質をお造りになったという。神の実体の派生として、神の実体が別れ出でて物質になったものではない、と述べています。」

これは矢内原忠雄『土曜学校講義㈠　アウグスチヌス告白』351―352の文章であるが、いささか冗長と思われるアウグスティヌスのこれほど的確明解な要約はないであろう。

アウグスティヌス自身も、『告白』第十二巻の「はしがき」には、「天」とは「いつも神の顔をながめている霊的ないし知性的被造物」を、「地」とは「もろもろの種類の物体的なものがそこから形づくられた無形の質料を意味する」と述べている。

このようにアウグスティヌスは、天使・天上界の創造に始まる宇宙の開闢から、キリストの復活・最後の審判・

宇宙の完成に至るまでを、創世記巻頭の七日間のなかに読み込んでいる。

『失楽園』の世界は如何。神は、すべての天使を、正しく立てる者をも、過ちを犯した者をも共に造った、という。

I created all the ethereal powers
And spirits, both them who stood, and them who failed, …
Ⅲ. 100-101.

悪魔(セイタン)もまた、「神が私を、輝ける者として造った（me, whom he created what I was ／ In that bright eminence, Ⅳ. 43-44）」ことを認めている。

神みずからが住む天国、すなわち heaven of heavens も、そこに住むすべての天使も、神は、（キリストによりて）創造された、とある。

He heaven of heavens, and all the powers therein,
By thee created, …　　Ⅲ. 390-391.

このように「初めに、神は天地を創造された」の「初め」を「キリスト」と解釈する説は、オリゲネス『創世記講解』（一・一）に始まり、アウグスティヌス『創世記逐語注解』（一・一・二）にも見える。「初め」は、①「時

間のはじめ」とも、また②「すべてのものの最初」とも、あるいは③「神の言葉である独り子としての原基的なるもの（principium）」とも取ることができる。ミルトンは、この第三の解釈にしたがって、この行を書いている。

また、「地」についても次のようにいう。

Thus God the heaven created, thus the earth,
Matter unformed and void : darkness profound
Covered the abyss : but on the watery calm
His brooding wings the Spirit of God outspread, ...

VII. 232-235.

「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」（創世記一2）のミルトン版である。matter unformed and void は the earth と同格であり、matter は第五巻472行で「すべては一つの原質料から出来ている」といった、その「原質料（one first matter, V. 472)」を指す。

このように「天」といい、「地」といい、ミルトンはアウグスティヌスと一致する。

しかしアウグスティヌスのような人も一つの間違いをしている。「第七日には夕もなく、また日没もない」とあ

るのは、おかしい。夕が一日の始まりだから、夕がなければ第七日は来ない。ただ日没がないだけである。また、『告白』第三十五章（五〇）の末尾に、創造の六日間「そこには朝があり、また夕がある」とあって、創世記の記事とは朝と夕との順序が逆転している。これは、朝があって勤労の一日が始まり、夕があって休息が訪れる、という普通の人々の感覚に添うものである。聖書のように「夕があり、朝がある」というと、まるで一日は夜間だけで昼間がないような印象を与える。その点で、朝を先にし、夕を後にしたのは自然なことであるが、聖書からの逸脱ではある。

第六日目に造られたアダムとイーヴが最初に迎えるのは第七日の夕べである。『失楽園』では、第七日目の始まる夕がいまエデンを訪れようとしている、第六日目の太陽が沈み黄昏（たそがれ）が東の方から夜の先触れとして迫っている、という。

And on Earth the seventh
Evening arose in Eden, for the sun
Was set, and twilight from the east came on,
Forerunning night; ...　　VII. 581–584

したがって二人の唱和する祈りは、夕の祈りが朝の祈りの前に来ることは当然である。

夕の祈り

月桂樹や天人花など馥郁たる樹木に覆われた住居に着くと、アダムとイーヴは共に立ち共に同じ方向に向かい、眼前にひろがる大空と大気、地と天、皎々と輝く月、満天の星々に思いをこめ、それらを造

りたもうた神を賛えて、言った。

全能の創造主（つくりぬし）よ、あなたは夜をも、
また昼をも造り給いました。わたしたちは定められた仕事に従い、
あなたの賜うあらゆる祝福の極致ともいうべき
二人の愛と助け合いのうち、幸わせに
一日を終わりました。またあなたの造り給えるこの楽園は、
わたしたち二人にはあまりにも広すぎて、溢れる恵みも、
分け合う人とてなく、取り入れないまま地に落ちます。
しかし、あなたは、わたしたち二人から全地を満たす人類の生まれることを
約束なさいました。やがて彼らもわたしたちと共に
あなたの限りなき善を、目覚めるときも、また今のわたしたちのように、
眠りの賜物を求めるときも、誉め賛えるでありましょう。

四 724—735

第六日にも「定められた仕事（appointed work Ⅳ. 726）」といえば、食物として与えられた「全地の面にある、種をつけるすべての草と種をつける果実」（創世記一29）を集めることであった。こうして生み、増え、地に満ちて、海・空・地のすべての生きものを支配することが、創造されたその日、二人が受けた神命である。

では、アダムが罪を犯して楽園から追放されるまで、どれほどの時間、楽園に留まることができたのであろうか？　第七日をもって、歴史の終焉、新天新地創造の日と見なす黒崎幸吉、アウグスティヌスとはおのずから異なるクロノロジーを『失楽園』は想定している。Alastair Fowler は、神がキリストを神の独り子と宣言し、王と定め、すべての天使に服従を誓わせた所謂キリスト高挙の日を第一日とし（第五巻）、その結果起こる天の反乱（第六巻）、反逆天使の追放を補う新しい天地と人間の創造（第七・八巻）、反逆天使たちが神への復讐を謀る会議（第一・二巻）、それに備える天上の集会と悪魔の地球への旅（第三・四巻）、人間の誘惑と堕落（第九・十巻）という出来事を経て、人間が楽園を追放される日を、ファウラーは第三十三日と計算している（註釈本の序文）。最終巻（第十一・十二巻）の主題は、将来に起こるべき世界の救済である。

『失楽園』の時間

『失楽園』は、いわばこの三十三日間に起こった出来事を扱う作品である。天使や彼らが住む「諸天の天」も神によって創造されたものであるという記述は、先に触れたとおりであるが、それがいつであったかの言及はなく、所与の前提とされている。ファウラーによって見事に計算された、この一覧表によれば、人間が造られたのは第十九日であり（これが創世記およびアウグスティヌスの第六日に当たる）、そしてアダムの堕落は第三十二日の正午であり、追放は翌第三十三日の正午である。

アダムとイーヴの、夢みるような幸福な楽園の生活は、二週間に過ぎない。アウグスティヌス流に言うならば、可感的（可知的にあらず）な天、すなわち『失楽園』の「この新しく造られた宇宙（せかい）、第二の天（this new-made world, another heaven, Ⅶ. 617）」の創造に要した時間が一週間であることを考えれば、二週間は決して短い時間ではない。したがってアダムとイーヴの生活も長い生活のうちに倦怠を生み、そこに悪魔の忍び込む隙もあった、

と言えなくもない。喋々喃々も結構だが、「話が多すぎていやになる（much converse perhaps／Thee satiate, IX. 247-248）」こともあったはずである。

分業の提案　だが、イーヴがアダムと離れて仕事をしようと分業を提案したのは単に倦怠のためばかりではなく、日増しにふえる仕事量のために能率的に片づけようと思ったからでもあった（九205―225）。

アダムはそれに対し、「神がわれわれに退屈な苦役を強いられるはずはなく、理性と結びついた楽しみを味わうために造られたのだ」（九242―243）、仕事の合間のリフレッシュメント、微笑みを交わす会話は心の糧となる、微笑みこそ理性から溢れ出るもので、動物には与えられていない、微笑みは愛を養うもので、愛こそ人間生活の最高の目標である、と諭す。

が、一人になりたいというイーヴの気持ちも認めて別行動を許す。そのとき'solitude ... is best society. IX. 249'という、キケロに由来する当時広く知られたアフォリズムを口にする。一人であれば、あれこれ相手のことを思い、かえって思いは深まり、甘美な再会の願いをかきたてるものだ、という文脈（コンテクスト）で使われている（が、私には、コンテクストとは無関係に、この句だけで、ひとりある孤独こそ、精神の王国に君臨し、宇宙万物を領有し満喫できる、満ち足りた境地を示す名句のように思われる）。

ともあれ、事件の始まりに、倦怠と能率があるということは、この詩が近代の詩であることを証しする。

夫婦間の齟齬　しかしセイタンが身近かに潜んでいるとき、一人きりでいるのは敵に乗じられる危険がある、やはり夫のそばを離れないのが安全で賢明な道だ、とアダムは不安をかくせない。そのとき彼は自分のことを「お前

に生命を与え、いつも庇い、守っている（That gave thee being, still shades thee and protects. IX. 266）」という。

が、このセリフはイーヴにとって、いやに恩着せがましく、鬱陶しく感じられないだろうか？　彼女は果せるかな、ツンとして、「愛情が踏みにじられ、不当にも邪険に扱われたかのように」不気嫌となる（'As one who loves, and some unkindness meets, IX. 271' の平井訳）。

堕落前というのに二人の心理戦はすでに熾烈である。アダムは宥め、おだて、セイタンは「天使たちさえ惑わす狡猾な敵」だ、彼の悪意と詭計とを侮ってはならない、お前こそ「なぜわたしと一緒に試練に会おうとしないのか、わたしこそ試練に会うお前の美徳の最善の証人なのに？」（九315―316）と、あくまで一緒にいようとイーヴを引きとめる。心配性で内向きなアダム（domestic Adam in his care, IX. 318）。

そんなアダムに業を煮やすイーヴは、こんな狭いところに閉じこめられ、ひとりでは身を守ることもできず、たえず戦々競々として敵を恐れなければならないとしたら、それはエデンであってエデンでない、また、他人に援けられなくては、ひとりで試みにも遭えない、そんな不完全な者に神は私たちを造られたのだろうか、と反発する。

夫婦の諍い

イーヴの攻撃的な口調に対し、アダムの口調も激しくなる。先程までは、「ただ一人のイーヴよ、ただ一人の同伴者よ、いかなる生き物にもまして愛しく、比べようもない！」（九227―228）などと、また「神と人との娘、永遠不朽のイーヴよ！」（九291）とも呼びかけていたのに、ついにここでは一言「おお、女よ」（九343）である。そして高飛車に彼の形而上学を説く。それは人間の「自由」に関する問題で、人間が神の所有物か、神に隷属する者ならば背く可能性はない、しかし神はそういう必然的強制的な服従を喜ばない、人間の側からの「自発的な奉仕（voluntary service, V. 529）」を要求し、それゆえ人間に背く自由も与えた、というものである。

それはすでに第三巻（99―128）で「理性もまた選択である（reason also is choice, Ⅲ. 108）」といって神が御子に、第五巻（520―541）でも同趣旨の事柄を、天使ラファエルがアダムに語っている。いずれも存在の上位の者が下位の者に諭している。第九巻のここでも、アダムにそういう上位者の意識があった。

「理性」が狡猾なセイタンに欺かれ、罠に陥る可能性もある、それゆえ戒められたとおり警戒を怠らず、誘惑されそうな機会は避けるべきだ、試練は求めなくとも来るものだ、とアダムはイーヴを引きとめるものの、終には根負けして、一人でも警告をうけて警戒している方が、二人一緒にいてもお互いに任せ合って油断しているよりは安全だ、とお前が思うのならば行くがよい、「みずからの意志でなければ、いてくれたって、いないのにも劣る（thy stay, not free, absents thee more, Ⅸ. 372）」と匙を投げる。最後には、「生来の無垢のまま、己が持てる美徳を頼りに行くがよい。全力を尽せ。神はお前に対しその務めを果たされたのだから、今後はお前が務めをはたせ」（九373―375）と勵まして送り出す。

あなたのお許しをえたから、といってイーヴは出かける。傲慢な敵がよもや、か弱い方を狙うこともあるまいが、もしその気でも、退けられていっそう恥をかくだけだ、といって夫の手からそっと彼女は手を離す（九386）。二人が再び手を握るのは最終第二行、楽園を離れるときまで待たなければならない（十二648）。

彼女はあたかも解放されたかのように、山の精・森の精のごとく軽やかな足取りで、森の方へ歩いていった。その姿をアダムは、もっと傍にいて欲しかった、と思いながら熱い視線で、長く見送っていた。イーヴも、正午までには戻り、昼食や午後の休息は完璧に楽しいものにする、と約束した（九386―403）。

だが、この時を最後に、楽しい食事も快い休息も楽園に戻ってはこなかった。花と木蔭の間に、伏兵のごとく待っていたセイタンは、願っていたとおりイーヴが独りでいるのを見つけた。

一方、イーヴは馥郁たる薔薇の香りに包まれながら、色とりどりに咲き誇る薔薇の、垂れさがる花を、天人花の茎でそっと起こしてやっていた、「彼女自身が最も美しい花ながら、最良の支柱から遠く離れて支えるものもないことを」（九432―433）も知らないで。

イーヴの誘惑

蛇身に乗り移ったセイタンは、最高の賛辞を捧げ、最大の阿諛追従を並べたてて（九532―548、606―612、684）、イーブの注意をひく。イーブは蛇が人間の言葉を話すことに先ず驚く。イーヴは蛇が人語を語ることのできる理由を訊く。

蛇はイーブを「禁断の樹（the Tree／Of prohibition, IX. 644－645）」へと導く。禁制の不当を鳴らすセイタンの挙止動作を、ミルトンはアテネ、ローマの雄弁家にたとえる。セイタンが蛇の体をしていることを考えると、可視化は難しいが、ミルトンのその描写、「人間に対する熱意と愛情と、さらにまた人間が蒙っている損害に対する義憤とを装い、……激しい感情に苛まれている者のごとく身悶えし、……或る重大な主義・主張を説こうとして従容として起ち上がり、激しい熱意にかられて前口上を述べるのももどかしげに、激しい調子でいきなり本題に入っていくが、やおら身を起こし、背を伸ばし、全身に熱情をみなぎらせた、その身ぶり、態度、動作は、彼が口を開く前からすでに聞く者の注意を一身に惹きつけていた」（九665―678）、これは古代の雄弁家というよりも、われわれ

にはヒットラーの演説を連想させる。

イーヴの堕落　イーヴはセイタンの説得に負けて禁断の木の実に手をのばす。ここがこの長い叙事詩のクライマックスである。アダムが禁断の実を食べる箇所、あるいは、イーヴが詫びアダムが赦す箇所に、クライマックスを求める説などがあるが、どちらも理に過ぎている。具体的な行動として端的に表現されているのはイーブ堕落の、この箇所である。

...her rash hand in evil hour
Forth reaching to the Fruit, she plucked, she eat :
Earth felt the wound, and Nature from her seat
Sighing through all her works gave signs of woe,
That all was lost.　　IX. 780-784.

蛇は、この果実は動物をして人間に等しいものたらしめたように、人間をして神々のようにならしめるであろう、という（九710―711）。イーブは「女として自分に欠けているものを補い、いっそう彼の愛情を惹きつけることができる、今以上に彼と同等な人間に自分を高めることができる、そしておそらく……いつの日か彼の上に立つ人間になれるかもしれない」（九821―825）と思う。この最大の危機のさなかにもイーブの心を占めるものはアダムへの思いであった。

しかし自分ひとりが死んで、アダムが「別のイーブ」（九828）と暮らすことになると思った途端、彼を道連れにすることを決意する。

一方、アダムの方もイーブの帰りを待ちわびて、彼女に捧げる花の冠などを作っている。が、彼女が持ち帰ったものは禁断の木の実であった。イーブは果実の効果を強調してアダムに勧める。眼は開け、心は広く、思いは豊かになって、神の高さにまで昂められた、これもひたすらあなたのために求めたものであり、あなたと共に味わってこそ幸福というもの、あなたが味わって下さらなければ、身分が違って二人の仲は引裂かれ、私が神性を棄てようとしても、もう遅すぎて、運命が許さなくなるかもしれない、と脅す（九875―885）。

彼女が失われたことを知ったとき、彼は彼女を惜しむがごとく最上の賛辞を捧げる。

O fairest of creation, last and best
Of all God's works, creature in whom excelled
Whatever can to sight or thought be formed,
Holy, divine, good, amiable, or sweet!
How art thou lost! how on a sudden lost,
Defaced, deflowered, and now to death devote!
IX. 896–901.

アダムにとってもイーヴを失うことは自分自身を失うことだ（九959）、お前なしで、どうして私は生きていけよう（How can I live without thee? IX. 908）、たとえ神がもうひとり「別のイーブ（another Eve, IX. 911）」を造られても。（イーブが「別のイーブ」（九828）という言葉を口にしたわけでもないのに、アダムもまた全く同じ言葉を思いつく、ただし、イーブは嫉妬から、アダムは別人では埋められない当人への愛情から。）

アダムの動揺・堕落　現に蛇もイーブもともに生きているし、神とて最高の被造物として造られた人間を滅ぼし、万物の創造をご破算にしてセイタンに勝ち誇らせるようなことはなさるまい、とも思う。こうしてアダムは、ためらわず果実を食べた。大地は再び苦しみ、悶えるごとく奥底から震え慄き、自然もまた呻き声をあげた。空はかき曇り、雷鳴をとどろかせて、人間に死をもたらす原罪が犯されたことに、悲しみの涙を流した。

…he scrupled not to eat,
・　・　・　・　・
Earth trembled from her entrails, as again
In pangs, and Nature gave a second groan;
Sky loured, and muttering thunder, some sad drops
Wept at completing of the mortal sin
Original; …　　IX. 997–1004

二人は新しい葡萄酒に酔ったように陽気になり、翼が生えて、地を蹴って飛びたつ神になったような気がした。しかしまた偽りの果実は全く別の作用をひき起こした。肉欲に燃えて、愛の戯れに心ゆくばかり耽った。甘い肉の戯れに疲れ果てて、やがて深い眠りに落ちたが、眠りは異様な夢に悩まされ続けた。

目覚めて気付いたことは「無垢」のヴェールは消えてなくなり、「羞恥」の前に裸身をさらしていることであった。

羞恥

『キリスト教教義論』によれば、「羞恥」（コロンビア版XV 204 pudor・205 shame）は、「死」の四つの段階の第一段階である。第二段階は「精神の死」、すなわち神の恩寵の喪失、神の義のなかに生きていた生来の義の喪失である。第三段階は「肉体の死」であり、第四段階は「永遠の死」、永遠の罰へと断罪されることである。

恥かしさにいたたまれなくなったアダムがイーヴを詰る。かつては恍惚と歓喜に溢れて仰ぎ見ていた天使や神を正視することができない（九1080—1082）、「無花果」（九1101）の葉を縫い合せて腰のまわりを隠し、「罪」と「羞恥」とを避けようと提案する。

しかし、覆いは空しく、「あの最初の裸体の栄光（that first naked glory, IX. 1115）」とは似ても似つかぬ醜態をさらすばかりである。「お前が私の言葉を聞き、私の頼んだとおり一緒にいてくれたら、よかったものを、不幸にも今朝どこで思いついたか、あんな奇妙な漂泊の欲望にとりつかれなければ！　相変らず幸わせていられたのに、今はもう、善いものはなんにもなくなり、ただ恥かしく、裸かで、惨めなだけだ！　今後は金輪際、信頼を証明してみせるなどと要らぬことを言ってはならぬ。証拠を見せると言い張るなんぞは堕落の始まりだ（九1134—1142）。

言質をとらえて非難されると、イーヴも激高して言い返す、「なんと残酷なことを！　こんどの禍はあなたが私

のそばにいても、いや、あなた自身にだって、起きたかもしれない。それを私だけが悪い、一人で行きたいといったことが悪い、とおっしゃるのですか。私は命のない一本の肋骨のまま、あなたの脇から離れるべきではなかった、というんですね。あなたが女の頭（かしら）なら、そんな危険なところへは絶対に行くな、と何故命じなかったのですか？ 唯々諾々と大した反対もせず、むしろ許し、認め、快く送り出して下さったではありませんか。反対なら反対と、ぶれずに、きっぱり反対して下されば、私が罪を犯すことはなかったし、あなたも私と一緒に罪を犯すことはありませんでした」（九1144―1161）。

売り言葉に買い言葉　さすがにアダムも、この言い分には初めて怒って、きり返す、「何たる忘恩！　お前が失われたとき、私自身は生きながらえて幸わせに暮らすこともできた。ただお前への愛を示すために、喜んでお前とともに死ぬ決心をしたのだ。その私が、今お前の罪の責任を問われなければならないのか？　お前をもっと厳しく引きとめておくべきだった、と言うが、危険な敵が潜んでいることは、口が酸っぱくなるほど言った。それ以上すれば強制になる。自由な意志に対して、強制をするべきではない。お前は自信満々だった、危険に会う心配はない、いや会えば、光栄ある試練の絶好のチャンスだなどといって。私にも過ちがあったとすれば、お前には、どんな悪もお前を試みることはすまいと思えるほど、完全なものがあるように過大に評価しすぎたことだ。この過ちが私に罪を犯させた。それが今お前に責められている。女の価値を過信して女の意志どおりにさせる男の身にはこんなことがふりかかるのか。女は縛られることに我慢できない、それで任せておけばおいたで禍が起きる。となると、たちまち、女を気侭に振舞わせた男の気が弱いからだ、と非難する」（九1163―1186）。

このように互いに自分の非を認めず、相手を責めつづければ、争いは終ることなく、人間関係はデッドロックに陥る。

人間の力では二進(にっぷ)も三進(さっぷ)も行かなくなったとき、事態の打開には別の次元の介入を待たなければならない。それゆえ第九巻はここで終り、第一〇巻は舞台が天上に移り、その影響力が地上のアダムとイーヴにもあらわれるということになる。

行詰り　アダムは不幸な現状を嘆く、「ああ、あの幸福にとってかわって、この惨さはなんとしたことか！（O miserable of happy! X. 720）」。祝福の生涯は一転して呪詛(のろい)の身となり、かつては神の御顔を拝することを最高の幸福と感じていたのに、今ではその顔を避けようとしている（一〇722―725）。そればかりか子々孫々に及ぶ呪詛を思うと、なぜ頼みもしないのに土くれより人を造り、暗闇から引きあげ楽園におきたもうたかと創造主を恨み、違反の結果が死であるなら、すぐに訪れない死を怪しみ、即座の死を願う。

そして、おおよそ死について考えられるすべてのこと、死によって霊魂と肉体とはどうなるか、死後の状態は如何、また死をもたらした責任者は誰か、について思いをめぐらす。

やがてアダムの心は、結局私が、私一人が、すべての腐敗堕落の源として、すべての非難を受けるべきだ、と思う。

On me, me only, as the source and spring
Of all corruption, all the blame lights due; ...
X. 832–833.

あゝ、しかしそれさえ愚かな願いだ、地球より重い、いや全宇宙よりも遥かに重い、この重荷――たとえあの女が分担してくれるとしても――荷えると思っているのか（一〇834―837）、とも。

こう考えてくると、何を願おうと、何を恐れようと、逃れる望みは全くなく、過去・未来の誰よりも惨めな人間に思えてくる。匹敵するのはセイタンだけだ。「良心」よ、なんという恐怖と戦慄の深渕に追い込むのか、深みからさらに深みへと投げこまれて、逃れる出口が見出せない（一〇838―844）。

アダムは大地に身を投げ出し、声をあげて嘆き悲しんだ。夜の空気も、穏やかで涼しかった堕落前とは一変し、陰湿な、まがまがしい暗闇となっていた。むしろ一刻も早く死の裁きが下るのを願った。悶え苦しむアダムを見かねて、イーヴは慰めの言葉をかけるが、アダムは厳しい目付きで、はねつける、「汝、蛇よ、わたしの前から消え去れ！（Out of my sight, thou serpent!）、お前は蛇と呼ばれるにふさわしい女だ、お前は蛇と共謀し、蛇と同じくらい陰険で、憎むべきだ」（一〇867―869）。

この行は、イエスが「サタンよ、わが後に退け」（マタイ一六23）といった言葉を連想させる。これはイエスがペテロに言った言葉である。ペテロは一番弟子、やがて教会の築かれるべき礎石、イエスの一番身近かで、一番信頼する人物である。そのペテロをサタンと呼んだのである。それと同じく、アダムはイーヴを蛇と、すなわちサタンと呼んだのである。イエス対ペテロ、アダム対イーヴ。最悪最低の罵倒の対象が、最も近しい、最愛の、将来を託すべき人物であるとは！

悔改めへの道程　この後、アダムは長々と、あらん限りの女性呪詛の言葉を並べる。アダムは後悔はしているが、「悔改め」はしていない。イーヴを責めるばかりで、自分を責めていない。ここでイニシアティヴをとったのはイ

ーヴである。イーヴが罪を告白したのである。罪の罰としての死を、自分ひとりで引受けようとしたのである。初めは、蛇に騙されたという弁解や、捨てないでくれという哀願で始まるが、そういう夫婦二人だけの人間的関係から、「罪を犯した」という神との関係に移ってゆく。

私たち二人は罪を犯しました。が、あなたはただ
神に対してのみ、私は神とあなたに対して犯しました。
ですから私は審判（さばき）の座に帰り、
そこで大きな声をあげて神に哀願します、
罰の宣告をあなたの上には下さないで、
悉く私の上に、あなたにとってこのすべての禍の源である
私の上に、ただ私の上にのみ下してくださいと、
神の怒りが加えられて当然な身なのですから。

Both have sinn'd; but thou
Against God only, I against God and thee;
And to the place of judgment will return,
There with my cries importune Heaven, that all
The sentence, from thy head removed, may light

On me, sole cause to thee of all this woe;
Me——me only, just object of his ire!

X. 930–936.

この終りの二行と、先にアダムが口にした二行を比べてみよう。

On me——me only, as the source and spring
Of all corruption, all the blame lights due; …

X. 832–833.

二人ともそれぞれ自分ひとりに神の裁きが下ることを願っている。'On me——me only' の繰返しは全く同じである。だが、男女で、物言いに違いがあることを考慮しても、イーヴの場合の切実さの方がまさっている。事実、アダムはこんな殊勝なことを言いながら、その舌の根も乾かぬうちに、女性呪詛のありったけをイーヴに浴びせかけている。それに引きかえ、イーヴの弱りようは本物である。アダムもそれは認めざるをえない。

しかし、アダムの上から目線で諭すような口調は変っていない。「お前は今も以前と同じように考えが足りない。神の怒りのすべてを、お前ひとりで背負うのは無理な話だ。……私自身がお前よりも先に裁きの座に行って、——本来私が保護すべきであったにもかかわらず、つい危険な目にあわせてしまったお前の女性としての弱さと脆さを釈明して、どうかこれを許し、すべての罰と怒りを私の頭に加えていただきたいと大声で、お願いするつもりだ」

（一〇947―957）。

Thy fraily and infirmer sex forgiven,
To me committed, and by me exposed.　X. 956–957.

アダムは短い言葉ながら、イーヴの言い分を十分に聞きいれたのである。イーヴに、もはや盾突く理由はない。アダムは続ける、「ここでこれ以上言い争い、互いに責め合うのはやめようではないか。この悲しみを分かちあい、互いの重荷を軽くするよう愛の務めに励もうではないか。宣告されていたこの日の死もどうやら直ぐではなく、ゆっくり訪れる禍のようだ――長い日をかけて、われわれの苦痛を増し、子々孫々にまで伝わる死となるようだ」（一〇958―965）。

イーヴの過激な提案　さすがのイーヴも気を取戻し、アダムへの優しさを示す。そして心中に決する提案を述べる。それはなんと子を残さないことであった。子どもたちが生まれてくるのは、この呪われた世界である。さんざん悲惨な苦しみをなめ、挙句の果に死ななければならない。だから子どもを残さなければ、貪欲な「死」の胃袋も私たち二人だけで満足しなければならなくなるだろう、と。そしてこの提案はさらにエスカレートして、自殺の提案となる。

しかしあなたが、お互い仲よく語り合い、顔を見詰め、愛し合っているのに、

愛の当然の営みである夫婦の甘い抱擁を控え、
同じ欲望に苦しんでいる自分の愛する妻を眼の前にしながら、
満たされる望みもなく、ただ欲望に苛(さいな)まれ続けることが、
とても辛い、困難なことだと思われるのでしたら、――恐らくそれは
私たちが恐れている何ものにも劣らないほど惨めな苦しいことかもしれません――

But if thou judge it hard and difficult,
Conversing, looking, loving, to abstain
From love's due rites, nuptial embraces sweet,
And with desire to languish without hope,
Before the present object langnishing
With like desire, which would be misery
And torment less than none of what we dread; ...

X. 992–998.

もしそうだとしたら、自分と子孫たちを恐怖から解放する方法は、われわれ自身の手で「死」の役目をみずからに果たすことです。最後には死ぬほかないという恐怖に戦(おのの)きながら生きながらえるより、一番簡単な方法は「死をもって死を滅ぼすことです」。

Destruction with destruction to destroy.　X. 1006

美しいイーヴの口から洩れるこの激しい科白は読者をたじろがせずにはおかない。「彼女はただ死のことばかり思いつめ、顔面も蒼白であった（so much of death her thougths／Had entertained as dyed her cheeks with pale. X. 1008-1009）」。

アダムは、この提案に少しも動かされることなく、慎重に思慮を働かせながら心を明るい希望へと高めていった、そしてイーヴに自殺をしてはいけない理由を説く（ここが『失楽園』において自殺論ともいうべき唯一の箇所である）。

自殺

お前が生命と楽しみを軽んずることは、お前のうちに、生命や楽しみよりも、もっと崇高で優れたものがある、という証拠だ。だが自殺をすれば、お前のうちにあると思われるその優れたものを消滅させてしまう。また生命は本来神から与えられたものであって人のものではない。神から預ったものであるから、生死は神に委ねるべきである。（「主与え、主取りたもうなり」（ヨブ一21）という。）しかるに自殺はそのことを忘れ、生命を私有物のごとく自分の自由になるものと思っている。私有物と思えばこそそれに執着して、正しい愛し方を越えて過度に愛し、失うとなれば生命を軽んずるどころか、苦悩・愁嘆の騒ぎとなる。

また、もし死は悲惨の極みであるから、死にさえすれば宣告された処罰を免れられると考えて死を願うとすれば、きっと神は、そのようにして先を越されることなく、もっと賢明な方法で復讐の怒りを揮われるであろう。

それよりももっと恐ろしいのは、そんな挽ぎとったような死では、宣告どおり負わなければならない苦痛を免

れられないばかりか、むしろそういう頑な行為に神が怒って、われわれの死を永続させられるのではないかが心配だ、という（一〇1013—1028）。

それゆえ、「お前の裔があの蛇の頭を砕くであろう」といわれた神の宣告を想いおこし、神のより賢明な解決策を待つことにしよう、と提案する。

女の裔　しかし「お前の裔が蛇の頭を砕くであろう（thy seed shall bruise／The Serpent's head, X. 1031－1032）」という神の宣告は、アダムが聞いたものでも、イーヴが聞いたものでもなかった。「女の末裔がやがてお前の頭を砕く（Her seed shall bruise thy head, X. 181）」というのは蛇に対する宣告であった。アダムはそれを側で聞いていただけである。

創世記第三章においても、女の子孫がお前の頭を砕く（三15）という宣告は蛇に向って言われたもので、女に向かっては「苦しんで子を産む」ことと「男が女を支配する」こと（三16）だけであり、アダムに向かっては「生涯食べ物を得ようと苦しむ」（三17）ことと、最後には「塵に返る」（三19）ことだけである。

『失楽園』では、この創世記の記述が文学的に敷衍される。罪を犯したアダムは神の声が聞こえても、神の顔を避け、身を隠した（一〇97—102）、神はアダムに「出て来い」（一〇108）と声をかける。アダムの弁解に対して、神は「神の声を無視して女の命令に従うとは、この女が、お前の神だったというのか?」、女を支配することこそ男の任務であったのに、その資格も地位も女に譲り渡してしまったのか、と叱る（一〇144—156）。

次に神の追求はイーヴに及ぶ、「女よ、お前はいったい何をしたのか?」（一〇158）と。イーブは「蛇に騙されて私は食べた」（一〇162）と答える。

これを聞くと直ちに蛇に向かい、「お前は生きているかぎり地面に腹をつけて這い、ただ塵埃だけを食わなければならない」（一〇177―178）ということと、「この女の裔が、やがてお前の頭を砕き、お前もその者の踵を砕くであろう」（一〇181）と宣言する。

こういうふうに蛇を裁いておいてから、イーブに向かい、「苦しみのうちに子供を産むことになる」（一〇194―195）ことと、「夫がお前を支配することになる」（一〇196）ことを宣言する。

次いでアダムには、「生涯、額に汗してパンを食べなければならない」（一〇205）ことと、「本来塵であるから、塵に帰らなければならない」（一〇208）ことを申渡す。イーブにもアダムにも聖書の記事どおりそれぞれ二つのことが言渡された。

『失楽園』において注目すべきは、この一連の宣告のなかで、蛇への裁きの直後、人間（イーブとアダム）への裁きの前に、女の末裔が蛇の頭を砕き、蛇がその者の踵を砕くという神託の内容が、地の文として簡潔に要約されていることである。

女の末裔とは「第二のイーブであるマリアの子イエス」（一〇183）であり、彼は「空中の長（おさ）であるセイタンが天から稲妻のように落下するのを見、ついで墓から蘇り、墜落した権天使、力天使たちを捕らえ、公然と彼らをさらしものにして凱旋し、長らく奪われてセイタンの領分となっていた空中を輝しく、虜（とりこ）者を率いて天に昇っていった。そうして最後にはセイタンをわれわれの足の下に砕きたもうであろう」（一〇183―190）。

Jesus, son of Mary, second Eve,
Saw Satan fall like lightning down from Heaven,

Prince of the air; then, rising from his grave,
Spoiled Principalities and Powers, triumphed
In open show, and with ascension bright
Captivity led captive through the air,
The realm itself of Satan long usurped,
Whom he shall tread at last under our feet; ...

X. 183–190.

生誕、復活、昇天、審判、キリスト教のすべての教義が初めから終りまで、すべてこの八行のうちに述べ尽される。最後の一行だけは未来形であるが、他の七行はすべて過去形であり、既往の事実なのである。

「御子」（一〇64、70）と「永遠なる父（Father Eternal）」（一〇68）との関係も第十巻の初めにすでに語られている。父なる神の仕事は「命ずる」（一〇68）にあり、御子の仕事は天と地において父の「意志を行う」（一〇69）にある。それゆえ「罪を犯した者を裁く」（一〇71—72）のも御子の仕事となる。父の意志を行う者としてまさに「一家の父」（一〇216）のように、アダムとイーブの身の上を配慮しなければならない。それは先ず「獣の皮（skins of beasts, X. 217）」で二人の裸形を覆ってやることであった。

衣服

罪を犯したときアダムとイーブを先づ襲ったものは「羞恥（shame, IX. 1058.）」であった。「羞恥」が「上着（robe, IX. 1058.）」のごとく彼らを覆ったのである（典拠は詩篇一〇九篇29節「恥を上着としてまとう」、

欽定英訳では、mantle)。全身を覆う羞恥によって彼らは神や天使を正視することができない。いっそ「森の住人となって孤独のうちにひっそりと生きていきたい（O! might I here／In solitude live savage, IX. 1084–1085. Cf. savage, i. e. like an inhabitant of the wood)」とさえ思う。しかし、さしあたり（for the present, IX. 1092)、いちばん恥にさらされ、いちばん醜く見えると思われるところをお互いの眼から隠す手段を講ずる。それが「いちじく（The fig-tree, IX. 1101)」の広くて滑らかな葉を縫いあわせて腰のまわりに巻くことであった。しかし、どんなに工夫して縫いあわせても罪と羞恥を覆い隠すには、「空しい覆い（vain covering, IX. 1113)」でしかなかった。

義の衣

罪を犯した二人を裁くために遣わされた御子は裁き主であると同時に救い主でもある。死を遠い時期まで延期するとともに（一〇209—211)、彼らの裸形を憐れんで「獣の皮（一〇217)」で覆ってやった。御子はそのとき彼らの醜い「外なる裸形（outward, X. 220)」を獣の皮で覆うだけでなく、さらに醜い「内なる裸形（inward nakedness, X. 221)」を彼の「義の上着（robe of righteousness, X. 222)」で包み、父なる神の眼から隠したのである、という。

『失楽園』におけるこれらの記述は、もとより創世記第三章21節「主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた」の記述に基づくものである。そしてこの一節について、黒崎幸吉は次のような略註を付す、「手製の無花果の葉を以て作れる裳を以ては彼らの裸体を覆ふに足りなかった。神は手づから犠牲の動物を屠り、その皮を以て衣をつくりて彼らに着せ給ひ、彼らをして神の前に出で得る様にし給ふた。後に至り神の羔なるキリスト屠られ給ひ、我らはキリストを衣て（ロマ一三・一四、ガラテヤ三・二七）神の前に立ち得るに至って、始めて完全に人の罪は贖はれる」(『旧約聖書略註上』16—17)、と。

関根正雄もその『創世時代講解』（『関根正雄著作集第一三巻』178頁）で、「皮衣」は「恵みの印」であり、カルヴァンのいわゆる「キリストの義の衣」と結びつき「恵みの衣」である、パウロのいう「キリストの義を着る」ということで、「恥とか、恐れとか、罪とかは、覆われ、……覆われることによって消され、とり去られる、罪をただ暴露してみても、罪の問題は片付きません。ですから罪の告白をする人がありますが、問題があります」という。そして、それに続く解説は、伝道者にふさわしく、直接経験した具体的事実に則って説明力があり、興味ぶかい。

審判の猶予　ところで「服従の唯一の印である唯一の命令（the sole command.／Sole pledge of his obedience, Ⅲ. 94–95）」に背けば、その日のうちに死ぬ筈であった。

The day thou eat'st thereof, my sole command
Transgress'd, inevitably thou shalt die, ...

Ⅷ. 329–330.

しかし、禁令を犯したイーブが生きているのを見て、アダムは禁令を軽く見なし、蛇が人語を語るという先例もあることだから、あるいは「天使や半神（angels, demi-gods, Ⅸ. 937）」になれるかもしれない、いや、少なくともせっかく万物の霊長として造られた者をむざむざ亡ぼすことはなさるまい（九928—938）、と高をくくり、ついには「その日に死ぬ」という宣告はもう「無力で無効（vain and void, Ⅹ. 50）」であるとさえ思うに至る。しかし、死は直ちには臨まなかったが、「猶予（Forbearance, Ⅹ. 53）」は「無罪放免（acquittance, Ⅹ. 53）」ではない。それはも

っぱら神の「寛大（bounty, X. 54）」によるのであった、しかし正義は貫徹されなければならない。

義と愛　天地の創造から最後の審判に至るまで、すべての業を父は御子によりて為したもう、とは、すでに第三巻390—391行に見えるが、ここ第一〇巻でも御子は父の「代理者（Vicegerent, X. 56）」として彼らを裁かなければならない。しかし、父の意志は「正義に憐憫を伴わしめる（Mercy colleague with justice, X. 59）」ということであった。

御子は、それに応えて、「両者が共に十分に満たされたことを明らかにして父の御心を鎮めることができるように、憐憫をもって正義を和らげよう」という。

I shall temper so
Justice with mercy, as may illustrate most
Them fully satisfied, and thee appease.
X. 77–79.

だが、それは結局、アダムとイーブが受けるべき罰を代わってわが身に引受けることであり、いずれ最悪の事態が御子の上にふりかかってくることになる（一〇73—77）。父が御子を「人間の味方、仲保者、みずからが身代（みのしろ）となる贖い主、堕ちた人間を裁くために人間となるべく定められた者（一〇60—62）」と呼ばれる所以である。

神の黙示

第一〇巻の初めにおかれたこの箇所は、いわば第三巻の要約ないし復習といえる。第九巻の堕落に始まって第一〇巻へと続いてゆく人間のドラマに、神と御子との天上の対話が挿入された形である。だが、この意味は、人間のドラマが人間自身は知らぬところで、神の掌の上に支えられていることを明らかにするためである。読者は安心して事態の成行きを見守ることができる。

同じことが、この箇所にすぐ続く、「セイタン」、「罪」、「死」の場面にもいえる。決定的な戦闘はすでに第九巻において済んだ。第一〇巻はいわば戦勝者による戦後処理である。セイタンは最高司令官ながら単身、身を挺して勝利を獲得した。故郷に凱旋して行う得意のあの戦勝報告（一〇460―503）。

悪魔（セイタン）を最高司令官とするなら、彼の側近、麾下の二将軍にも譬えるべきは、妻の「罪」と、孫の「死」である。彼らは父セイタンが「星一つ輝かぬ夜の渋面」とも、また「常に威圧するような嵐が、まわりに吹きすさんでいる」（三424―426）ともいわれる「虚しく形なき無限（the void and formless Infinite, Ⅲ. 12）」の「混沌」をかきわけて、辛うじて進んだ危険な一筋の路を見事に拡幅舗装して「途方もなく長い橋梁（a bridge／Of length prodigious, X. 301-302）」を築造した。それはまさにセイタンの航跡をそのまま辿ったものであった（一〇314―315、367）。かくて、地球の地獄化というか、地獄と地球との一体化がおこって、地球と地獄とは誰でも自由に往来できる一つの国、一つの大陸となった（一〇391―393）。「大地獄帝国（The Infernal Empire, X. 389）」の完成、それは栄誉ある功績、勝利の偉業（一〇390―391）であった。

だが、得意の瞬間にセイタンは転倒する（一〇513―514）。一方、その場には居合わせず楽園に潜入していた「罪」と「死」とは所期の作業を盛んに実行するものの、ついには地獄に投げ入れられる、しかも最後の最後に。彼ら二人を呑みこんで地獄の口は閉じる（一〇636）。

こういう神の黙示に接し、ましてや汝の裔が悪魔の頭を砕くという宣告を思い起せば、アダムとイーブにもおのずから「安全な解決策を求めたい（let us seek／Some safer resolution, X. 1028−1029）」という気持ちがおこってくる。

みずから命を断ったり子供を産まないようにすれば（一〇1036—1037）、セイタンの頭を砕くという復讐も果たせなくなる。最初に宣告された即座の死も、イーブには出産の苦しみ（一〇1051）だけ、アダムには糧を得るための労働（一〇1054—1055）だけに軽減された。しかも出産の苦しみは、子供誕生の喜びによって直ちに償われるし（一〇1052—1053）、労働とて怠情を命じられるよりは遥かにましだ（一〇1055）。呪われた大地（一〇201）は厳しい寒さとなったが、神は衣類を与えたもうた。このように「やさしく、恵み深い御心（mild／And gracious temper, X. 1046−1047）」に祈り求めるならば、多くの慰めを与えられ、この人生を送ることができるだろう、と思うに至る（一〇1081—1085）。

このとき、堕罪後、追放以前というこの段階で、「火の発明」に言及することは興味深い。

知の起源

堕罪以前は「地上には絶えず春が微笑んで春の花を咲かせていたし、昼も夜も同じ長さの時間であった」（一〇678—680）が、堕罪の結果、天球の軸と地球の軸とは「二十度あまりも傾斜」（一〇668—670）し、太陽は「ほとんど耐え難いほどの寒さと暑さを地球に及ぼす」（一〇653—654）に至った。原罪は「突き刺すような酷寒と灼けつく猛暑」（一〇691）をもたらした。「激しい狂いが先ず生命なき事物から始まった」（一〇707）のである。

気象の急激な変化のため、アダムが冷えきった体を暖める必要を感じる折も折、近くで落雷によって発生した火が、太陽に代わる快い熱気を送ってくれた。それがヒントになってアダムは、「屈折して集った太陽光線を枯葉に受けて火を燃え上らせる」（一〇1070—1071）か、「二つの物体を激しく衝突させ、空気を摩擦させて火を起こす」（一〇1072

—1073）という方法を思いつく。素朴ながら、他の動物と区別される人間独自の科学・文明の始まりではないか。

神の与えた「獣の皮」は先には羞恥を隠すためであったが、ここでは寒さで体を壊さぬよう保温の役に立った。このように、こちらから求めなくても神の方から時宜にかなった配慮をして下さる（一〇1057—1059）。落雷によって発生した火もまた、その一端である。「このような火の用い方や、われわれの過ちが招いた禍を救い癒やす、いろんなその他の方法を、神はきっと教えて下さるに違いない」（一〇1078—1081）。ただしそれには、「祈り、恩寵を求めて懇願する」（一〇1081—1082）ということがなければならない。

悔改め

それゆえ、いまわれわれが為しうることは、「神がわれわれを裁かれたあの場所へ引きかえし、うやうやしく神の御前（みまえ）にひれ伏し、謙虚に自らの罪を告白して、許しを乞い、いささかも偽りのない悲しみと柔和な謙遜のしるしとして、悔いた心から溢れ出る二人の涙で大地をうるおし、二人の溜息であたり一帯の大気をみたすほかはない。」

What better can we do than, to the place
Repairing where he judged us, prostrate fall
Before him reverent, and there confess
Humbly our faults, and pardon beg, with tears
Watering the ground, and with our sighs the air
Frequenting, sent from hearts contrite, in sign

Of sorrow unfeigned and humiliation meek?
X. 1086–1092.

「神のもとめたまふ祭物はくだけたる霊魂なり　神よなんぢは砕けたる悔しこゝろを藐しめたまふまじ」（詩篇五一17）という。神は必ずや御心をやわらげ、不興も消え、その澄みわたる御顔には「慈しみと恵みと憐れみ（favour, grace, and mercy, X. 1096）」だけが輝くであろう。

アダムがそう語ると、アダムと同じく悔改めたイーブもまたアダムと同じ行動をとった。第十一巻最後の七行は、先に引用した七行の 'our' を 'their' に、'us' を 'them' に変え、動詞の時制を過去形にしてそのまま繰返し、決意を如実に実行したことを示している。

悔改めの深化

この第十一巻最後の箇所において顕著な特徴は、ファウラーの注記が示すとおり、「悔改め」の心の深まりようである。ミルトンは『キリスト教教義論』第一巻19章「悔改め（De resipiscentia, i. e. Of Repentance）」のなかで、「悔改め」の段階的に深まる次の五段階を区別している、「罪の自覚」「後悔」「告白」「悪からの離脱」「善への転向」である（コロンビア版一五385、エール版六468）。だがこれはカトリックの『公教要理』に見られる「悔悛」の五段階に何とよく似ていることであろうか、「糺明」「痛悔」「遷善の決心」「告白」「償」である（もっとも最近の『カトリック要理』は糾明を「反省」、痛悔を「悔い改め」、遷善の決心を「悔い改めに伴う決心」に改めている、告白と償（い）はそのまま）。

なお、「二つの物体を摩擦させて空気を熱し火を起こす」

(we)... by collision of two bodies grind
The air attrite to fire ; ...　　X. 1072–1073.

ファウラーは attrite についてもOED から引用する。

1. Worn or ground down by friction. ? *Obs.*
2. *Theol.* Having attrition : see ATTRITION 4.

とあり、1.の引例にはミルトンのこの箇所が挙げられている。だが、ファウラーは、コンテクスト全体のなかで、2.の意味を看過することができない。そこで、彼は attrition を引く。

attrition. 4. *Theol.* An imperfect sorrow for sin, as if a bruising which does not amount to utter crushing (*contrition*); 'horror of sin through fear of punishment, without any loving sense, or taste of God's mercy' (Hooker), while *contrition* has its motive in the love of god. (A sense invented by scholastic theologians in 12*th c.*; the earliest in Eng.)

とあり、次の引例がある。

1765 Tucker *Lt. Nat.* II 65. Three stages in the passage from vice to virtue: attrition, contrition, and repentance. The first is a sorrow for mischiefs men have brought upon their heads by their ill doings.

こうなれば contrition, contrite, repentance, penitent の該当箇所も引かなければならなくなる。

contrition. 2. *fig*. The condition of being bruised in heart; sorrow or affliction of mind for some fault or injury done ; *spec*. penitence for sin. Cf. Attrition.

contrite, 2. *fig*. Crushed or broken in spirit by a sense of sin, and so brought to complete penitence. 1667 Milton *P. L.* X 1091.

repentance. 1. The act of repenting or the state of being penitent; sorrow, regret, or contrition for past action or conduct ; an instance of this.

penitent. A. 1. a. That repents, with serious purpose to amend the sin or wongdoing, repentant, contrite. 1667 Milton *P. L.* X 1097.

OEDのこれらの語釈を見ていると、attrition と contrition の違いは、『公教要理』の「不完全な痛悔」と「完全な痛悔」の違いに重なって見えてくる。「不完全な痛悔」とは「天主を愛するためでなく、罪の醜さを恥じたり、天国の幸福を失い、なお地獄或は煉獄の罰を招くことを恐れたりして、罪を忌み嫌うこと」であるのに対して、「完全な痛悔」とは「天主を深く愛するところから、その御旨に逆ったことを悲しみ、或はイエズス・キリストの御受難の因となったことを悔んで、罪をいみ嫌うこと」である、という。

attrition がまだ自己本位であるのに対して、contrition は何よりも「神の愛」がその動機となっている。'-trite', '-trition' の部分は共通だから、違いは 'at-' と 'con-' の違いだけである。'at-' は 'ad-' と同じく 'to', 'at' 「移動・方向・近似・開始」を、'con-' は 'together' 「共同・共通・相互・同等」を意味する。'-trite', '-trition' はラテン語 'tero' に由来し、'to rub' 「摩擦・彫琢する」ことを表わす。いずれも、押しつぶされ、すりつぶされ、打砕かれて、あるいは疲れはてて到りつく心境であるから、「擦り磨く」という含意があることは意味深いことである。

しかし『失楽園』第一〇巻1073行では、「空気」が摩擦されているのだから、ファウラーの注記は興味深いが強引のきらいなしとしない。とはいえ第一〇巻では、「空気」までが研き澄まされてアダムとイーブの打砕かれて悔いし心に天来の火を点火した、ということはできるだろう。『失楽園』第一〇巻結びの文脈のなかで、この悔改め深化の道程ほど適わしいものはない。OED において attrite, contrite, penitent の語釈に三語とも『失楽園』のこの箇所からの引例があることは注目される。

追放へ

神は御子の執成しにより、悔改めたアダムとイーブの祈りを受けいれる。だが、これ以上人間が楽園に住むことはできない、と宣言する（十一48―49）。なぜなら、堕落によって穢れてしまった人間を楽園自体が吐き出してしまう、楽園は不純物を容れることができないからだ。これは神が「自然」に与えた法則である。ファウラーの注は、これは追放を罰としてではなく、堕落による性質の変化の物理的不可逆的結果として表現したものである、という（十一49―57）。神がひとたび自然に法則を与えた以上は、神もそれに従わなければならないことを示している。

先行的恩寵

神が定めた法則である。神はその法則に任せきりにしてもよかったはずであるが、それらすべてに先んじて「先行的恩寵（Prevenient grace, XI. 3）」なるものがある。楽園からの追放という大仕事の責任を担うことになったのは、今回は天使マイケルである。マイケルは「神の如き（に似る）者」という名をもつ天使で、黙示録に「天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだ」（黙十二7）とあるによっても分かるとおり武勇に秀でた戦いの天使であり、『失楽園』第二巻において堕天使たちが雷霆（いかづち）とともに恐れたのはマイケルの剣であった（二294）。第六巻では「天使の指揮者（of celestial armies prince, VI. 44）」に任じられるも魔軍との戦いは五分に五分、ついにマイケル対セイタンの一騎打ちになるが勝負はつかず（六320―353）、結局はキリストの出陣を仰がなければならなかった、そのマイケルである。「社交的な天使（the sociable Spirit, V. 221）」といわれたラファエルの「なんでも打ち明けて話せるような親しみ易さはなく、威厳があって凛とした厳しさをもつ（十一234―236）」マイケル。神は彼に、「罪深い夫婦、この聖からざる者たちを聖別された土地から容赦なく追放し、彼らと彼らの子孫にとって永久の追放であることを宣言させる。しかし、すでに和らいだ心をもって涙を流し、罪

を嘆き悲しんでいるのだから、恐怖を与えるようなことは一切控え、忍耐強く素直に従うならば、未来には何が起こるか、女の裔を通じて与えられる新しい契約のことも交えて明かし、心安らかに送り出してやってもらいたい」と言う（十一105―116）。マイケルは、義と愛と、情と理と、ともに尽くさなければならない大任を託されたのである。

未来の予告

マイケルはアダムを楽園のなかでも最も高く頂上からは地球の半分が一望できるほどの高い山（十一377―379）へ導き、そこから、この先、人類にどんなことが起こるかを示す（十一357）。

かくして、第十一・十二巻は最も簡略で、要点をおさえた全世界史あるいは全宇宙史。ここに最後の審判を経て新天新地が到来するまでの全人類の様子が描かれる。親の罪は直ちに子に報い、アダムの罪が惹きおこした最初の出来事は、兄カインによる弟アベルの殺害であった。これが「死が人間に臨む最初の姿」（十一466―467）であった。「主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった」（創四4―5）。聖書にはその理由が書かれていない。しかし『失楽園』は端的に、カインの「献げ物には誠意がなかったからだ（for his was not sincere, XI. 443）」という。兄は初生りの果物に緑の初穂や黄色い束を、手当り次第、ろくに選別もしないで掻き集めて持ってきただけだが、弟は自分の飼っている羊の群の中から特に立派な初子を数頭選んで屠り、臓腑と脂肪を切り分け、香をふりかけ、薪にかけて、定められた儀式のとおりに犠牲（いけにえ）を献げたのである（十一435―440）。

悲しみに打ちひしがれるアダムに天使マイケルは、「たとえ塵と血に塗（まみ）れて死んでも、その信仰は神に認められて、正当な報酬を受けるであろう」（十一458―460）、といって慰める。不慮の死を遂げた、すべての正しい人の死後の運命を、『失楽園』はここに要約している。

アベルを初めとして、「唯一人の生ける正しき人間（The one just man alive, XI. 818)」と認められたノア、「信仰の人」(十二152)、「正しき人」(十二273）と称えられるアブラハム、また、「やがて現れる大いなる仲保者の神聖な任務を予め前もって自から担ったモーセ」（十二240—242)、これら一連の人達はすべて、キリストを指し示す「型と影（types ／ And shadows, XII. 232－233)」である（ヘブル書八5に由来)。

マイケルはアダムに死の姿と、死に至る途の多様さ、恐ろしさを示す。非道な暴力や火災、洪水、飢饉、さらには飲食の不節制がもたらす病気。その病気の名前は、よくも並べたと思われるほど数多く列挙する(十一479—489)。先の山頂から見渡せる古今東西の大都市の名前の列挙と同じように(十一385—411)、叙事詩が百科事典的といわれる所以もここにあるか、と読者は納得させられる。

アダムは、かつて神の姿に似せて造られた人間が「かくも常人には耐えがたい苦痛に押しひしがれ、見るも無惨な苦難に落されなければならないのか」(十一509—511）と嘆く。が、このような現状は自から招いたものであることをマイケルに戒められ、ぐうの音も出なくて全面降伏する。

“I yield it just”, said Adam, “and submit”,　　XI 526.

それにしても、このような苦しい死に方のほかに、元の、同じ性質の塵に帰る途はないのか、と尋ねる。マイケルは、ある、と答える。それは「度を過ごす忽れ（Not too much, XI. 531)」という（デルポイの神殿に「汝自身を知

れ」とともに刻まれていた）掟を守り、飲食において節制を心掛け、口腹の快楽を貪らず、適切な栄養を摂取して歳月を送れば、熟した果実のように母なる大地の膝に落ちることができる、少なくとも荒々しく捥きとられるのではなく、死を迎えるのにふさわしく熟したものとして安らかに摘みとられることができる、これが老齢というものである、そのときには若さも力も美しさも失せ、枯れて、弱く、灰色に変ってゆく、感覚も鈍く、すべての快感を味わうこともなくなり、希望と喜びに満ちていた若き日の血気に代って、冷たく乾からびた憂鬱な無気力が血管を支配し、お前の心を重苦しく圧し、遂には生きる楽しさを一切消滅させてゆく、と語る（十一530―546）。

アダムは答えて、「今後、私は死を避けて逃げることも、また無理に生命を長らえることも望まず、どうしたら美しく安らかに、この煩わしい重荷から解き放たれるかに心を傾け、生命を引渡すべく定められた日までは背負い、忍耐強く生命の終るのを待たねばなりません」（十一547―552）という。

これに対してマイケルは、「自分の生命を愛しても憎んでもいけない。だが、生きる限りは、よく生きよ。長いか短いかは、天に任せよ」と諭す。

“Nor love thy life, nor hate; but what thou livest
Live well; how long or short, permit to Heaven.” XI 553–554.

第十一・十二巻は超速で駆け抜けるように歴史を概観する。第十一巻の、このような天使とアダムの応答には、詩人ミルトンその人の本音とやさしさを感じる。

創世記第五章3節には、アダムは百三十歳にしてセトをもうけ、その八百年後、「アダムは九百三十年生き、そして死んだ」とある。

イーブの没年は分らない。イーヴが産んだセトの子孫から「セイタンの頭を砕き、その力を粉砕し、その両腕として猛威を揮っていた『罪』と『死』を亡ぼす」(十二430―431)救い主が生まれ、「新しい天と新しい地と、正義と平和と愛とにもとづく永遠無窮の代々を起こし、歓喜と永遠の祝福の実りをもたらすことになる」(十二549―551)のである。

(了)